

「教育臨床総合研究22 2023研究」

令和4年度の基礎体験領域の取り組み

A Report on the Approaches in the Educational Support Fieldwork Area in 2022

田中英也*

Hideya TANAKA

上代裕一*

Yuichi JODAI

長岡美沙*

Misa NAGAOKA

錦織稔之*

Toshiyuki NISHIKORI

飯島仁*

Hitoshi IJIMA

原丈貴**

Taketaka HARA

要旨

新型コロナウイルス感染症の拡大により、令和4年1月から中止となっていた基礎体験活動が、4月末に再開されることとなり、令和4年度内はその後年度末まで、学外での活動を継続することができた（但し、宿泊を伴う体験活動を除く）。4月は活動が制限されていたため、入門期セミナー、地域理解セミナーはオンデマンドで対応することとなったが、各学年対象の必修セミナー（9月、12月）や基礎体験交流会（2月）については、分散開催ではあったものの対面形式で実施し、同学年の学生間のみならず、上級生アドバイザーや他学年の学生との交流の機会を提供することができた。また、令和2年度から続くコロナ禍の影響により、在学中に十分に活動の機会が与えられなかった学年については、基礎体験活動の補填措置を認めることとなった。社会的にコロナ禍における行動制限が緩和されることに伴い、新型コロナウイルス感染症に係る大学のガイドラインも定期的に見直しがなされ、基礎体験活動の感染予防ガイドラインも適宜改正しながら運用することとなった。

〔キーワード〕 基礎体験活動 コロナ対応 教職志向性向上

I はじめに

昨年度の1月から中止となっていた学外での基礎体験活動は、今年度4月末に再開されることとなり、概ね年間を通して実施することができた。しかし、「新型コロナウイルス感染症に係る島根大学行動指針」は、令和5年3月現在においても「段階1」が維持されており、コロナ禍以前の状況には戻っていない。そのような状況の中でも、学生同士が対面で交流する機会を提供できるよう、分散開催や会場の広さを十分に確保するなど、開催方法を工夫しながら必修セミナー等の企画・運営を進めてきた。学外での宿泊を伴う基礎体験活動は、昨年度に続き

*島根大学教育学部附属教育支援センター

**島根大学教育学部保健体育科教育専攻（附属教育支援センター長）

中止せざるを得ない状況となっているものの、学生がエントリーできる基礎体験活動の件数は回復してきており、昨年、一昨年のコロナ禍に比べて、多くの学生を学外のフィールドへ送り出すことができている。このような状況下で、令和4年度に支援センターが行ったコロナ対応を表1にまとめた。

表1 令和4年度の教育支援センターの活動

月日	コロナ禍における基礎体験活動の対応	関連項目
4月	令和4年度前期は、授業の開始を1週間遅らせるとともに、第1週目（4/14～20）をオンライン授業で実施し、4/21より対面での授業が開始	I
4/21～28	入門期セミナー（1年生）をオンデマンドにて開催	II-1-(4)-1)
4/28～	学外での基礎体験活動が再開（宿泊を伴うものを除く）	I
5月	基礎体験活動の補填措置について具体的な検討開始	II-1-(3)
5/18～27	地域理解セミナー（1年生）をオンデマンドにて開催	II-1-(4)-1)
6/14	島根大学行動指針が【段階2】から【段階1】へ変更	I
6/14	基礎体験活動参加にあたっての新型コロナウイルス感染予防ガイドライン改訂	I, II-1-(1)
7/27	基礎体験活動の補填措置について教授会にて承認	II-1-(3)
9/26	発展期セミナー（4年生）の開催（2回に分けての分散開催）	II-1-(4)-1), 6)
9/27	充実期セミナー（2年生）の開催（2回に分けての分散開催）	II-1-(4)-1), 4)
9/28	スタートアップセミナー（1年生）の開催（2回に分けての分散開催）	II-1-(4)-1), 2)
11/1	新型コロナウイルス感染症に係る新たな学内連絡フローの運用開始	I
11/8	基礎体験活動参加にあたっての新型コロナウイルス感染予防ガイドライン改訂	I, II-1-(1)
12/7	応用期セミナー（3年生）の開催（第2体育館を使用しての開催）	II-1-(4)-1), 5)
12/20	第2回基礎体験活動連絡会議の中止を決定	II-3
R5年2月	令和5年度入門期セミナーの企画立案（宿泊なし、学内で実施）を開始	II-3
2/6	1・2年生基礎体験交流会の開催（3回に分けての分散開催）	II-1-(4)-1), 3)
2/7	令和5年度第1回基礎体験活動連絡会議・基礎体験合同説明会の中止を決定	II-3
3/8	基礎体験活動参加にあたっての新型コロナウイルス感染予防ガイドライン改訂	I, II-1-(1)
オンラインで開催した基礎体験活動		II-1-(4)-1), II-1-(2)
・入門期セミナー ・地域理解セミナー ・だんだん塾特別講義（センター演習） ・学習指導案づくり（センター演習）		
中止となった基礎体験活動		II-3
・第1回基礎体験活動連絡会議及び合同説明会 ・第2回基礎体験活動連絡会議 ・スクール・インターンシップ		

教育支援センターが運営する基礎体験活動には、必修となっている「各種セミナー」と、学外の事業所において開催される「体験活動」があり、さらに令和2年度からは、コロナ禍においても、オンラインで基礎体験活動を積み重ねられる「センター演習」も運営している。昨年、一昨年度と、センター演習によって卒業に必要な体験時間数を積み重ねた学生も多く、令和4年度も同様に、センター教員のサポートのもとで多くの学生がセンター演習に取り組んでいる状況がみられた。しかし、過去2年間にわたって断続的に学外での体験活動が制限された影響は大きく、年度当初の状況から、特に4年生と3年生が卒業までの限られた時間の中でカリキュラム上の540時間の基礎体験活動を積み重ねるには、学生のみならず、センター教員においても大きな負担となることが予想された。そのため、何らかの対応を考える必要性が生じ、年度の早い時期から、基礎体験活動の時間数に対する補填措置について具体的な検討を開始し、7月末から運用することになった（補填措置の詳細についてはⅡ-1-(3)参照）。

学外での基礎体験活動は、大学の行動指針に基づいて行われるため、大学の方針が変更されれば、必然的に基礎体験活動のガイドラインも見直しが必要となる。令和4年1月から、授業は全面的にオンライン対応となり、学外での基礎体験活動も中止となっていたが、4月の前期の授業開始に合わせて、一部対面授業が再開されることになったため、基礎体験活動についても大学の許可を得た上で、4月末より一部再開されることになった。この時期、島根大学行動指針は【段階2】であり、基礎体験活動もそれに応じたガイドラインを運用していたが、その後感染状況が落ち着き、6月14日からは【段階1】へと移行したため、この時点でもガイドラインを一部改正して運用する必要があった。また、11月には新型コロナウイルス感染症の陽性者および濃厚接触者に対する連絡フローの見直しもあり、この方針転換に合わせて、基礎体験活動のガイドラインも改正を余儀なくされた。さらに、3月には、卒業式におけるマスクの取扱いについての国の方針を受け、ガイドラインを再び改正した。

令和2年度より続くコロナ禍において、今年度が3年目にあたるものの、毎年異なるセンター運営が求められる状況にあり、センター教員はその都度、柔軟的に対応しながら学生たちと向かい合ってきた。4年間の学生生活の約3/4をコロナ禍で過ごした今年度卒業予定の学生たちが、コロナ禍以前の学生と同じ540時間の基礎体験活動を積み重ねられたのも、教育支援センターの教員の学生に対する思いと、状況を常に把握しながら迅速且つ適切に対応してきた結果である。本報告は、3年目のコロナ禍における基礎体験領域の取組内容について概説するとともに、今後のより充実した基礎体験活動の構築に向けて検討を行うものである。

Ⅱ 令和4年度の取り組み

1. 基礎体験活動

(1) 基礎体験活動の参加実績（専攻別体験等を除く）

平成25年度からの過去10年間の実績は、表2に示すとおりである。平成28年度まで参加学生延べ数が2,300名前後で推移していたが、平成29年度から2,000名を割り込むようになった。これは、平成29年度から入学者数を2割程度削減（募集定員170名→130名）したことが要因であると考えられる。また、今年度は令和2年度に引き続き、コロナ禍の影響（宿泊を伴う活動の停止等）を受けたが、募集活動数は293件まで回復し、学生参加延べ数も1,868名になった点は、大きな成果と言える。

まず、受入団体数が160団体にまで増えた要因としては、コロナ禍の影響を受け、学生の受入を中止したり活動自体を中止したりしていた活動が、今年度は実施されたことが挙げられる。次に、募集活動数が293件にまで増えた要因としては、受入団体数自体が増加したこと、通年型として募集されていた1件の活動が、期間を区切ったイベント型として募集され件数が増えたことが挙げられる。また、学生の参加延べ数が1,868名にまで回復した要因としては、募集活動数が増加したこと、コロナ禍ではあったものの、学生を継続的に送り出すことができたことが挙げられる。なお、この背景には、「基礎体験活動参加にあたっての新型コロナウイルス感染予防ガイドライン」(右記)等に基づき、新型コロナウイルス感染防止対策をより適切に講じ続けたことが考えられる。

基礎体験活動参加にあたっての新型コロナウイルス感染予防ガイドライン

本ガイドラインは、基礎体験活動参加にあたって受入団体関係者及び学生への新型コロナウイルス感染を予防するために策定したものです。活動に参加する学生は、以下の項目内容を厳密に行動・対応してください。

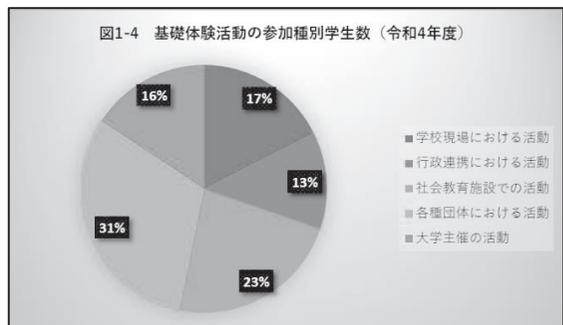
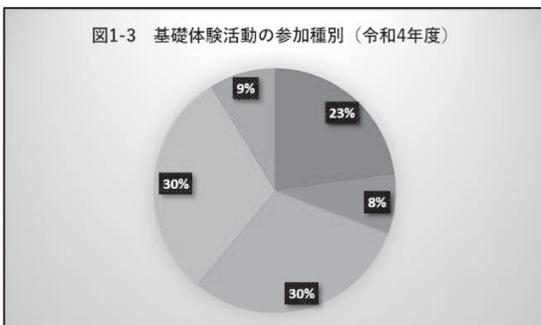
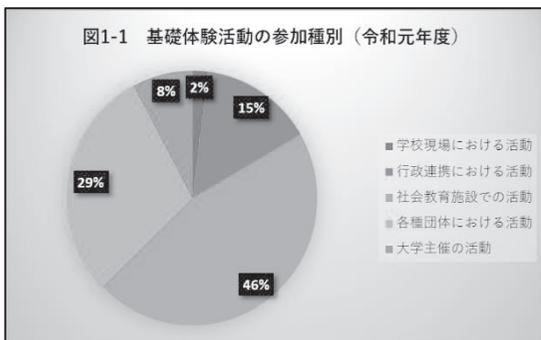
- 活動の14日前から帰郷待避(スケジュール帳やカレンダー等に記録する)。風邪症状の有無を確認するとともに、感染リスクの高い場所(鳥橋大学 伊「感染リスクが高まる『5つの場』」参照)へ行く機会を減らす。
- 日頃から十分な睡眠や栄養バランスのとれた規則正しい食事に心がける。
- 3つの密(密閉、密集、密接)を避ける(活動中の食事の際には、1メートル間隔を空け、食器を極力控えて一方を向いて食べる等感染防止対策を講じる)。
- 活動前後に手洗いやうがい必ず行い、活動中はマスクを着用し咳エチケットを徹底する。
 - ※ 屋内内に関わらず、運動中等での熱中症対策時には、マスクを着用する必要はありません。
 - ※ 受入先にて卒業式に参加する場合は、受入先である事業所のマスク着用にについての指示に従う。
- 県外に移動する場合は、事前申請および帰県後の報告と指導機関への連絡が必要となる(申請については教育支援センターへ申請)。
- 37.5度以上の発熱が認められた場合は活動に参加せず、次のとおり必ず3カ所以上の方法で状況を連絡する。また、陽性者となった場合は、以下の専用フォーム(添付ページ)にて陽性報告を行う。

連絡先	連絡方法
(1) 基礎体験活動受入先	電話にて
(2) 教育支援センター一部係員	メールにて
(3) かかりつけ医 または 各都道府県保健課の健康相談コールセンター	電話にて ※ 参考：松江市・鳥取県共同設置【電話0852-33-7438】
- 37.5度以上の発熱がない場合であっても、風邪症状や体調不良(倦怠感や息苦しき等)を感じる場合は活動に参加せず、必ず同様の対応を要す。
- 友人や家族等の感染が確認された場合や、本人が濃厚接触者に特定された場合は参加を要せず、必ず同様の対応を要す。
- 活動中は受入先である事業所の感染対策の指示に従い、活動中に発熱の風邪症状やその他の体調不良があらわれる場合には、必ず同様の対応を取る。基礎体験活動受入先に対する場で状況を確認した後、速やかに帰省する。

以上の項目内容に留意し、行動・対応いたします。
 令和2年7月10日施行
 令和3年3月8日改訂
 附属教育支援センター

表2 基礎体験活動への参加実績(過去10年間)

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R 2	R 3	R 4
受入団体数(団体)	244	206	181	184	183	192	188	93	133	160
募集活動数(件)	496	443	392	391	387	379	358	160	233	293
学生参加活動数(件)	370	253	323	337	327	319	303	147	203	278
参加学生延べ数(名)	2,469	2,396	2,223	2,305	1,818	1,913	1,985	1,554	1,691	1,868



令和元年度（コロナ禍以前のデータとして）（図1-1）と令和2年度（図1-2）および今年度（コロナ禍のデータとして）（図1-3）の体験活動の参加種別を割合で示すと、令和元年度は青少年教育施設を中心とする社会教育施設での活動への参加が多く、続いて各種団体における活動、行政連携における活動が占めている。これらの活動は、土・日曜日もしくは夕方等の放課後に行われる活動が多く、バス等での輸送手段が準備されているため学生にとって参加しやすく、また、宿泊を伴い大人数で募集されている活動であるため、経験・時間数も多く積めることから参加者は多くなる状況にあった。

しかし、令和2年度からのコロナ禍により、バスでの大人数の輸送が制限され、宿泊を伴う活動については停止となったため、社会教育施設での活動は減少せざるを得なかった。逆に令和2年度から割合が増加したものは、学校現場における活動と大学主催の活動である。学校現場における活動については、具体的には松江市立小学校長会主催の市内公立小学校での学習支援活動や、鳥取県内公立小・中学校での学習支援活動が主として挙げられる。さらに、今年度は、鳥取県教育委員会中部教育局主催の公立小・中学校での学習支援活動が加わった（来年度には、米子市立小中学校長会主催の市内公立小中学校での学習支援活動や、境港市立小学校長会主催の市内公立小学校での学習支援活動も加わる予定）。これらは、本学部の喫緊の課題である「学生の教職離れの解消」＝「教職志向性の向上」の取り組みの一つとして各団体関係者と連携して進めた結果と捉える。また、大学主催の活動が増加しているのは、後述の「教育支援センター演習」が大きく関係している。

参加種別学生数（累計）の割合から見ると、令和2年度から続くコロナ禍の中、基礎体験活動を運営・実施することに苦心したが、以前からの課題（同じ種類もしくは同じ事業主での活動のみに偏って参加している学生が多数いること）であった活動の偏りについて、バランスの平準化が図れたことは今年度も成果と言えるだろう（図1-4）。今後も基礎体験活動へ学生を継続的に送り出せるよう、新型コロナウイルス感染症に係る国の動向を注視しながら、適切に対応していきたい。併せて、各受入先との連携をより密にしながら、学生の教師力と教職志向性を高めていきたい。

（2）教育支援センター演習

本演習は、新型コロナウイルス感染症の蔓延が続く状況を鑑み、学内で参加できる基礎体験活動として開設している取り組みである。昨年度と同様に以下の演習を開設し、教師力を高めていくよう努めてきた。

○だんだん塾特別講義（全学部生対象）

学校現場や教育行政等の優れた実践者の講演会を収めた動画を視聴し、レポートを作成する取り組みを昨年度に引き続き行った。また、令和4年11月、令和5年1月および3月には、学生が直接講師の講義を聞く機会を設定した。

○学習指導案づくり（3年生後期以降対象）

学習指導案作成を通して、これまで学んだことを教育実践につなげることで、今後の教育実践に活用することをめざして取り組んできた。内容については、「生活科」（小学校

1・2年生),「総合的な学習の時間」(小学校3年生から中学校3年生),「特別活動」(小学校1年生から中学校3年生まで),「特別な教科 道徳」(小学校1年生から中学校3年生まで)から選択し,学習指導案を作成する。

○学校現場概論「学校現場経験者の先生と語り合おう」

学校現場経験者と語り合い(45分程度)を通して,学校現場で求められている力や教職の魅力,学校現場の課題,学級経営のノウハウ,生徒指導,保護者対応等について学ぶ。終了後レポートを作成し,提出する。

1) だんだん塾特別講義(全学年対象)

1月の段階で動画を視聴できる内容は,表3の通り。

表3 だんだん塾特別講義一覧

No.	テーマ
1	学級経営～グループからチームへ～
2	教職を目指しているみなさんへ
3	教育現場の実践とやりがい～魅力にあふれる教師になるために～
4	アドラー心理学からみた教育現場への提言
5	主体的・対話的で深い学びのためのICT利用・活用
6	少し未来の学校～新学習指導要領とふるさと教育・教育の魅力化～
7	解決志向アプローチを活かした未来の教室
8	現場校長から大学生へのメッセージ～教師を目指す皆さんへ伝えたいこと～
9	この世で最も素晴らしい仕事～私が出会った3つの衝撃から～
10	甘えとストレス～スマートな大人になるためのチェックポイント～
11	松江市の特別支援教育の状況・そして子どもたち
12	大学時代に学んだことは社会に出てから～1000時間体験学修の意義～
13	「現場で即戦力として活躍するために」～今,見ておくこと.そして,すべきこと.現場校長の視点から～
14	『「学習に向かう力を育てる体づくり」の実践から』
15	保護者とのほっとコミュニケーション
16	学びに困難を抱える児童生徒をどう理解し,育成していくか
17	へき地校(小規模校)の学校運営について
18	未来の先生のために～学級づくり～
19	学び合い支え合う集団づくり～人間関係づくりの必要性を理論や実践から学ぶ～
20	教育現場の実務と基礎体験活動のつながり
21	めざせ!教職
22	社会人に向けてステップアップ!～就職活動に係る面接試験の接遇や教員採用試験に向けた基礎知識等から学ぶ～
23	保健室から見えてくる学校の今
24	GIGAスクール構想やICT活用の具体内容を学ぶ～教育行政や学校現場での取組を通して～
25	仕事ってなんのためにするの?
26	自分を変える～接遇スキルを強い味方に!～

上記の内容を視聴し、提出されたレポート（1月段階）の総数は269本であった。テーマごとに提出されたレポート本数は図2に示した。今年度は平均約9.3本のレポートが提出されており、No.1、No.2およびNo.26のレポートがそれぞれ15本と一番多くレポートが提出された。

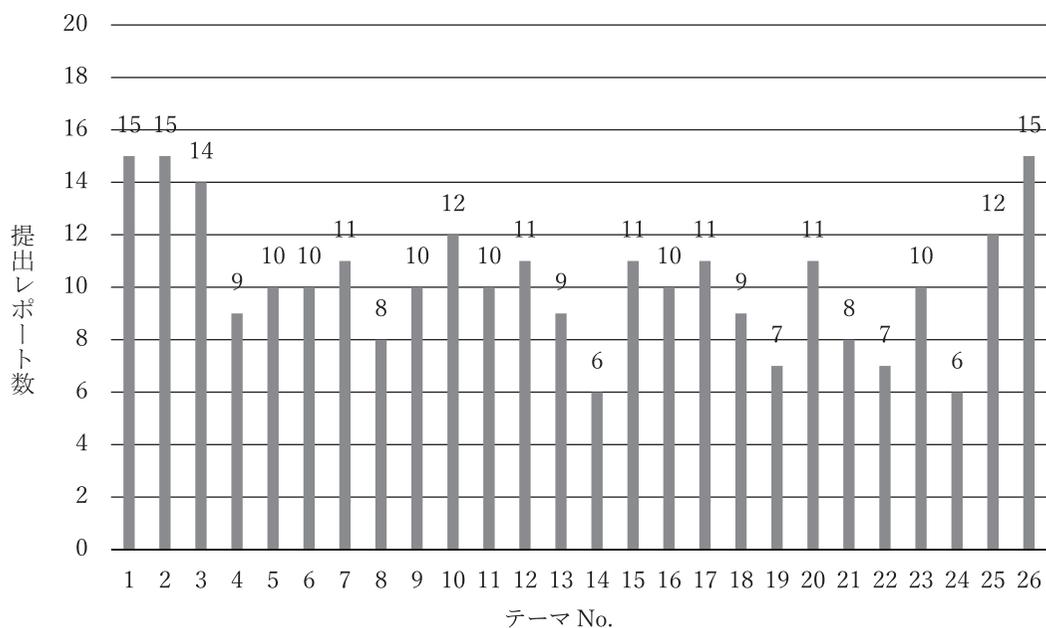


図2 だんだん塾特別講義レポートの提出状況

2) 学習指導案づくり（3年生後期以降対象）

総数170本の学習指導案が提出された（1月末時点）。各教科の学習指導案数を表4に、設定学年ごとの提出状況を図3に示した。

表4 学習指導案提出数

教科名	学習指導案数
「生活科」（小学校1・2年生）	32
「総合的な学習の時間」（小学校3年生から中学校3年生）	22
「学級活動」（小学校1年生から中学校3年生まで）	30
「特別な教科 道徳」（小学校1年生から中学校3年生まで）	86

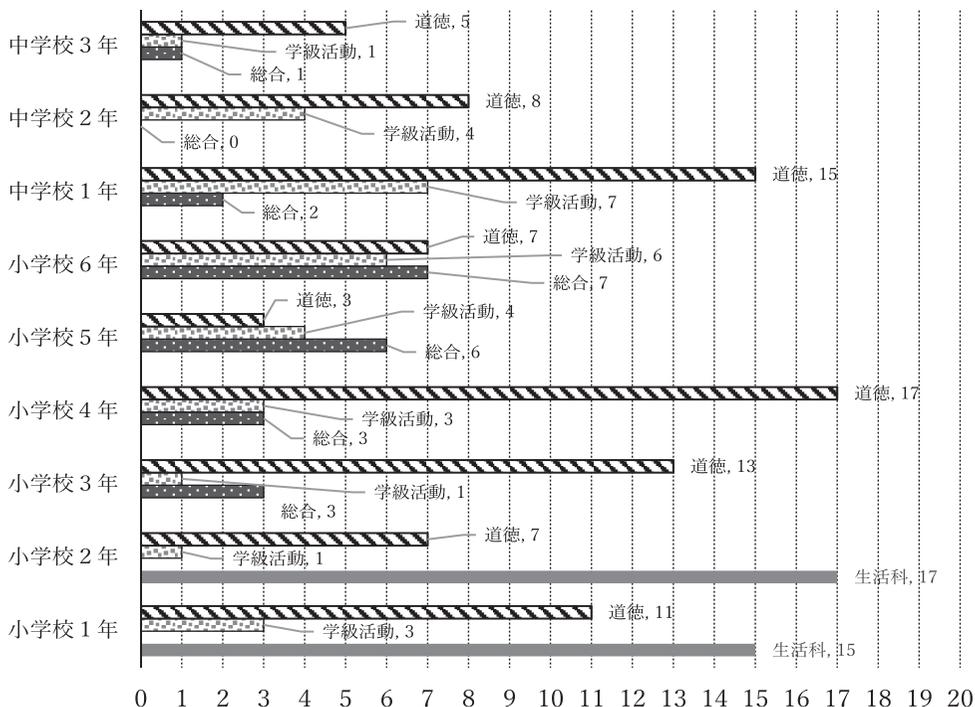


図3 設定学年ごとの提出状況

「生活科」の学習指導案については、小学校の1・2年生と学年は限られているが提出数は多かった。「特別な教科 道徳」の学習指導案については、学年平均約9.6本の提出があり、小学校第4学年（17本）、中学校第1学年（15本）、小学校第3学年（13本）の順で提出数が多かった。「学級活動」の学習指導案については、学年平均約3.3本の提出となっており、「特別な教科 道徳」の3分の1程度の提出数に留まっていた。また、小学校第3学年以上（中学校第3学年）までの「総合的な学習の時間」の学習指導案については、学年平均約3.1本に留まっていた。「総合的な学習の時間」については、指導に要する時間数が多くなることから長期間の「指導計画」を構成することが求められ、そこに困難さがあるものと思われる。「特別活動」の学習指導案については、1単位時間の計画となることが多いものの、前後の指導との関連、児童生徒の実態と指導内容との関連などについて十分に検討できていない状況が窺えた。今後も引き続き状況に応じた指導を適切に行うようにしていきたい。

3) 学校現場概論

昨年度より、教職大学院及び学部附属教師教育研究センターと連携し、対応できる教員数を増やして体制を整えている（表5）。

表5 学校現場概論「学校現場経験者の先生と語り合おう」担当者等一覧

	担当者 (所属)	これまでの勤務校 (主なジャンル)
1	上代 裕一 (教育支援センター)	中学校 (生徒指導, 学級経営, 危機管理, 教育相談, 部活動)
2	田中 英也 (教育支援センター)	小学校 (児童理解, 保護者対応, 仲間づくり, 教採に向けて, 特別活動)
3	錦織 稔之 (教育支援センター)	中学校 (社会科, ふるさと教育, 博物館連携, 進路指導, 特別支援教育)
4	飯島 仁 (教育支援センター)	小学校, 中学校 (学校安全, 人権教育, 情報連携-学級通信・校長室通信)
5	山中 慎嗣 (教育支援センター)	小学校, 中学校 (ふるさと教育, コミュニティスクール)
6	原 広治 (教職大学院)	小学校, 特別支援学校 (特別支援教育 (子ども・保護者支援))
7	船田 次郎 (教職大学院)	中学校 (教科指導, 学級経営, 生徒指導, 生徒会活動, 部活動)
8	三島 賢隆 (教職大学院)	特別支援学校 (聴覚, 知的, 教育相談, 特別支援教育コーディネーター)
9	藤原 建 (教職大学院)	中学校 (生徒指導, 保護者対応, 保健体育)
10	齋藤 英明 (教職大学院)	小学校, 中学校, 特別支援学校, 義務教育学校 (授業づくり, 学級・学校経営, 特別支援教育)
11	大久保 紀一郎 (教職大学院)	小学校 (メディア教育, ICT活用, 授業づくり, 学級経営)
12	吉田 博幸 (教師教育研究センター)	小学校 (体育, 学校経営)
13	長岡 素巳 (教師教育研究センター)	中学校・高等学校 (生徒理解と集団づくり, 社会科 (中学校), 地歴・公民科 (高校))

学校現場経験者との対話を終え、学生から提出されたレポート数は7本であった。レポートのテーマは次のようになっていた。

- ・「社会科の授業づくり」について
- ・「将来の不安への解決策」について
- ・「特別なニーズを持つ子どもの教育」について
- ・「インクルーシブ教育」について
- ・「県外就職か、地元就職か、そのメリットとデメリット」について
- ・「インクルーシブ教育と教育の現状」について
- ・「進路相談」について

自己課題をもちながら積極的に教員と対話を行い、レポート作成などで振り返る学生もいるが、やや広報などが十分でないことが影響し、レポートの本数は多いとはいええない状況であった。また、3年生の終わりから教員採用試験等就職に関する相談数が増加しており、その中で、それぞれの教員から専門とするジャンルに関しての内容理解を深めている状況もうかがえる。今後、適切な時期の広報等を行い、学生の自己課題を追究していく機会を保障するように努めていきたいと考えている。

教育支援センター演習については、基礎体験活動の一環として学生に定着しているものと考えられることができる。それぞれの学生の課題追究を深めたり、広げたりする機会として今後も工夫しながら継続していくよう努めていきたい。また、レポートや学習指導案については適宜、個別指導等を行い、学生の教育への認識が深まるようにしていきたいと考えている。

以下、だんだん塾講義と学校現場概論の感想から本演習の成果を示す。

学生の感想（抜粋）

「だんだん塾特別講義」感想レポートから（「教師を目指しているみなさんへ」）

小学校の先生は、中学校・高校と比べてより子どもたちとの距離が近く、授業外でも連絡ノートや日記、休憩時間など子どもたちと接する機会が多いように感じます。実際私が学校教育実習Ⅴで附属義務教育学校の前期課程に実習に行ったとき、「先生鬼ごっこしよう！」「先生絵描いて！」「先生これどうやってやるの？」と様々な場面で「先生」「先生」と呼ばれることが多く、休憩時間も子どもたちと一緒に遊んだ印象が強く残っています。小学校の先生は、フレッシュで子どもたちとも活発に触れ合うことができる人材が求められているということが分かりました。

中学校の先生は、どちらかという教科担任制が導入され、自分の担任のクラスから飛び出して多くの子どもたちと触れ合う機会が多いように感じます。また、部活動の指導も加わり、小学校とはまた違った授業外の子どもたちの姿を見ることができます。中学校の先生は、自分の学生時代の経験が活かされ、自分の話から子どもたちと打ち解け合うことができるのではないかと思います。また、クラス内外問わず、いじめ問題や家庭問題なども教師が抱える問題となっています。そのため、教科の知識・指導力はもちろん、学生時代に様々な経験をし、思春期の子どもたちとうまく接することができる人材が求められていると思います。

高校の先生は、担任の先生としての仕事よりも教科の指導が重点的で、特に大学受験を控える進学校の教師は受験に必要な知識や、実際の自分の受験経験などが活かされる場だと思います。私が高校生の時、受験で不安な気持ちを担任の先生に打ち明けると、最後の最後まで相談に乗ってくださり無事に受験を終えることができました。高校生は自分の中である程度将来の方向性を決めている子どもたちが多いため、子どもたちの意見や考えを尊重しつつ、それが成功するよう陰ながら支えることができる、そんな教師が求められているのではないかと思います。

学校教育では、単に教科的な知識・技能の伝達はもちろん、社会で生きるためのマナーやモラルの伝達、部活動での身体的・精神的成長、自身の進路について考え自己実現の達成の支援など、様々なことが求められていると考えます。そのため、教科指導力に加え、子ども理解・学校理解、リテラシー、リーダーシップなど教師に必要な力がたくさんあると思います。しかし一方で、教師のための教師力育成の機会があまり設けられていないというのも現状です。大学に限らず、教師になった後も学びの場が設けられるとっとより良い教師育成につながるのではないかと思います。その点で、それらの向上のために、島根大学で行われている基礎体験学修は非常に効果的だと感じました。ボランティア活動に参加することを通して、自身の経験値も上がり、将来子どもたちに伝えられる経験や意見が増えます。自分が基礎体験学修で学んだことを、将来担任を持つことになる子どもたちや、部活動の子どもたちに伝えていけたらと思います。

「学校現場経験者の先生と語り合おう」感想レポートから

（「県外就職か地元就職か、そのメリットとデメリット」）

今回、学校現場概論では、先生と就職先について語り合うことができました。わたしが「地元で就職するか、地元以外に就職するかで迷っている」と話すと、どちらのご経験もある先生が、そのメリットとデメリットについてお話してくださいました。人脈や文化に対する知識、土地勘など、そこまで教職に関係することではないことでも、壁になったり味方になったりすることを知って、教員採用試験の難易度や倍率、自分になじみがある土地かどうかだけではなく、今回お話して下さったことなども考慮して就職する場所を選びたいと感じました。わたしが心に残っている言葉は、「キャリア教育とは職業体験に行くことだけではなくて、児童生徒の持ち味に気づいてそれを世の中に生かす方法を考えることである」という言葉でした。わたしは子ども一人一人の声に耳を傾けることができる教員になろうという目標があるため、その言葉がずっと心の中に入っていました。キャリア教育に限らず、すべての教育は子どもたちのいい部分や弱い部分に気がつくためにあるものではないかと考えました。手段と目的をはき違えてしまいがちだけれど、そこだけは間違えてはいけないとこの学校現場概論を通して学ぶことができました。

（3）基礎体験活動の認定時間に対する補填措置

1) 提案の経緯

令和4年度の開始時点において、新型コロナウイルス感染症の流行が始まってから既に2年以上が経過しており、その間、学外での活動が断続的に中止されてきた（表6）。また、令和2年度および3年度の受け入れ団体数、募集活動数は、コロナ禍以前よりも少なく、学生たちは学外での基礎体験活動に参加する機会が制限されてきた。令和4年度開始時点においても、学外での活動は中止の状態が継続しており、その後の新型コロナウイルス感染症の収束の見通しを持つことは困難な状況であった。

入学してからコロナ禍にあった期間（宿泊を伴う体験活動の中止期間）は、学年別にみると、令和4年5月の段階で、4年生と3年生は「2年2ヶ月」、2年生は「1年2ヶ月」、1年生は「2ヶ月」となっていた。4年生および3年生にとっては、宿泊を伴う基礎体験活動が2年以上にわたって実施されておらず、3年生に至っては長期的・集中的な体験活動を行う機会が一度も無い状況であった。

表6 基礎体験活動の中止状況

学外での基礎体験活動を中止していた期間	2020年4月～8月 2022年1月～4月
宿泊を伴う体験活動を中止していた期間	2020年4月～（2023.3も継続中）
鳥取県での基礎体験活動を中止していた期間	2021年9月中

活動期間が制限され、募集活動数もコロナ禍以前より少ない状況が、基礎体験活動の認定時間にどのような影響を与えているのか、学年別に検討したところ以下の点が明らかとなった（表7）。

- ・入学当初からコロナ禍の影響を受けている現2，3年生は，1年次の認定時間数が例年よりも130～140時間程度少ない。
- ・3年次後期のスクール・インターンシップが実施されなくなった学年（R4.3卒業生，現4年生）から，3年次終了時の認定時間数が，100時間程度少ない。
- ・R4.3卒業生の4年間の体験活動時間数は，それ以前の学年よりも100時間程度少ない。一方で，4年次における1年間の活動時間数は，R2.3卒業生の倍以上となっている。

表7 各学年終了時の基礎体験活動の平均時間数

入学年度		1年終了時	2年終了時	3年終了時	4年前期終了時	卒業時	SI
2021	2年生	171.2	-	-	-	-	なし
2020	3年生	162.7	433	-	-	-	
2019	4年生	301.4	506.5	893.9	-	-	
2018	R4.3卒	295.7	558.6	900.6	974.3	1094	
2017	R3.3卒	271.7	559.9	1014.9	1035.6	1185	あり
2016	R2.3卒	319.7	651.8	1134.3	1192.7	1220	

(網掛けはコロナ禍の時期。SI：スクール・インターンシップ)

体験活動に参加できる期間の縮小や活動プログラム数の減少，宿泊を伴う活動の制限など，コロナ禍を過ごしてきた学生にとっては，それ以前の学生に比べて，基礎体験活動の時間数を積み上げにくい状況が続いていることは明らかであった。コロナ禍の状況を鑑み，令和2年度からは学内で活動できるものとして，センター演習（だんだん塾特別講義，学校現場概論，学習指導案づくり）を開設しているものの，教育支援センターの教員で対応できる人数や時間にも限界があるため，教育支援センターとしては，基礎体験活動の時間数を，代替措置によって補填することを提案するに至った。

基礎体験活動の時間数を補填する具体的な方策については，5月から教育支援センター内で検討を始め，教育支援センター会議や企画運営会議等での議論を経て，7月の主任会および教授会で審議，承認され，7月末より運用を開始した。

① 代替措置として認められる活動内容および認定の上限時間数

代替措置として，「体験活動として時間認定されていないもので，大学入学以降に実施（参加）した自身の学びをさらに深めるための活動や，専門性を高める活動」を，基礎体験活動として認めることとした。具体的には，以下のような活動である。

- ・自主的に参加したボランティア活動
- ・自身のスキルアップをねらいとしたセミナー等への参加
- ・これまでの学修内容をさらに深めるための研究会や学会等への参加
- ・資格を取るための講習への参加
- ・その他，指導教員が代替措置として相応しいと認めた活動

上記に該当する活動であれば，入学時からの活動を遡及して認めることとした。部活動やサー

クル活動、アルバイトなどは代替措置として認めないこと、大学が主催するボランティア活動など「ビビットポイント（大学生協で利用できる電子マネーポイント）」が付与されている活動については、ダブルカウントとなるため代替措置として認めないことも合わせて学生に通知した。

代替措置により補填する上限時間数については、これまでの学年ごとの実績をもとに検討した（表8）。4年生は、コロナ初年度の2年次における認定時間数が、コロナ前の学生と比べて80時間ほど少ないこと、3年次（スクール・インターンシップ無し）の認定時間数が、コロナ禍前の学年よりも80時間ほど少ないこと、から「160時間」を上限として認めることとした。3年生は、1年次の時間数がコロナ前と比べて140時間ほど少ないことから、「140時間」を上限として認めることとした。

表8 基礎体験活動（選択）の年間認定時間数

入学年度		1年次	2年次	3年次	4年次
2021	2年生	171.2			
2020	3年生	162.7	270.3		
2019	4年生	301.4	205.1	387.4	
2018	R4.3卒	295.7	262.9	342.0	193.4
2017	R3.3卒	271.7	288.2	455.0	170.1
2016	R2.3卒	319.7	332.1	482.5	85.7

② 代替措置による時間認定の手続き

代替措置による活動時間の認定手続きについては、以下のとおりである。

1. 体験活動として時間認定されていないもので、大学入学以降に実施（参加）した自身の学びをさらに深めるための活動や、専門性を高める活動について、「基礎体験活動（選択）の代替措置とする活動報告書」を用いて活動内容と活動時間を指導教員に報告する。
2. 指導教員は、学生より提出された活動報告書の内容をもとに面談を実施し、最終的な活動時間数を上限時間の範囲内で認定し、活動報告書に署名する。
3. 学生は、指導教員の署名入りの活動報告書を、教育支援センターに提出する。
4. 教育支援センターは、提出された活動報告書に示された時間数を、基礎体験活動（選択）の時間として認定する。（代替措置により届け出た時間数は、学内資格認定制度の時間数にはカウントしない）

③ 申請件数および認定時間数

以上の手続きにより提出された4年生および3年生の活動報告書の件数、認定時間数を表9に示した。

表9 代替措置の申請件数と認定時間数

	4年生	3年生	合計
申請件数(件)	34	33	67
認定時間数(時間)	3939	3610.5	7549.5

(4) 基礎体験セミナー等

1) 基礎体験セミナー等の対応と実績

今年度もコロナ対応が継続となり、昨年度の実施方法を踏まえながら学生にとって学びや親睦の機会が確保できるよう対策に努めた。今年度の対応と実績は、表10に示す通りである。内容・時間を必要最小限とし分散開催する等、会場を工夫することで昨年度よりも多くのセミナーを実施することができた。ただし、1年生対象の基礎体験合同説明会は中止とし、入門期セミナーと地域理解セミナーはオンデマンド教材で対応した。

表10 令和4年度基礎体験セミナー等(必修)の対応と実績

学年	セミナー名	認定時間	今年度の実績	対応等
1	入門期セミナー	22時間	7時間	必要な内容をオンデマンド配信し、その視聴とレポート提出を課す形で実施。不足時間分は基礎体験活動(選択)で補う。
	基礎体験合同説明会	1時間	中止	不足時間分は基礎体験活動(選択)で補う。
	地域理解セミナー	3時間	5時間	センター演習の紹介を兼ねて、オンデマンド配信した教材視聴とレポート提出を課す形で実施。
	スタートアップセミナー	3時間	実施	—
1・2	基礎体験交流会	2時間	実施	—
2	充実期セミナー	2時間	実施	—
3	応用期セミナー	3時間	実施	—
4	発展期セミナー	2時間	実施	—

2) スタートアップセミナー

本セミナーは、1年生が対象の基礎体験セミナーである。入学してから半年が過ぎたところで、初めて取り組んだ基礎体験活動(選択)について振り返り、今後の活動へのより良い見通しを持つことを目的として実施した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、分散開催により2回に分けて行った。詳細は下記のとおりである。

スタートアップセミナー2022実施概要

【1. 目的】

(1) 入学時からの基礎体験活動の取り組みを振り返ると共に、活動参加への心構えや手続き等の再確認を行う。

(2) 小グループでの体験発表等を通して、体験活動で得られる多様な学びや課題を共有すると共に、今後の活動に向けて意欲を高める。

【2. 対象】 1年生 135名 ※上級生アドバイザー（4年生） 12名

【3. 日時】 令和4年9月28日（水）

(1) 1回目（A, Bクラス） 9：00～12：00

(2) 2回目（C, Dクラス） 13：30～16：30

【4. 会場】 大学会館3階 大集会室

【5. 内容】

(1) 開会行事 ①挨拶（教育支援センター長の話）【5分】

②趣旨・日程説明【5分】

(2) 全体指導【35分】

①活動時間の確認及び手続きについて

②基礎体験活動の活動状況について（1年生の傾向等）

(3) グループ活動（学校教育実践研究Ⅰ・学校教育実習Ⅰの4クラス・6グループを活用）

①基礎体験活動発表会【50分】

○自己紹介。班ごとに司会者を決定。

○全員が、これまでの体験活動内容やそこから得た学び・課題を発表し合う。（1人5分程度、30分）

○体験活動を積み重ねることの意義について話し合う。

②上級生アドバイザー（4年生）からの助言【15分】

○より意欲的な参加に向けて具体例に助言する（体験活動発表内容も参考にして）。

(4) 本セミナーの振り返り【40分】

①上級生アドバイザーの話を受けて、今後の活動の見通しや取り組みへの姿勢をまとめる【25分】

②今後の活動に向けてグループ代表者の発表【15分】（1人1分程度×12グループ）

(5) 閉会行事【10分】

まとめ・連絡・アンケート



<スタートアップセミナーの様子>

以下、教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示す。

教職員の振り返り（一部抜粋）

- 本セミナーにより1年生同士の距離が近づいた。
- 仲間の話を聴く姿勢が良かった。
- まだ1年生なので、フリップの書き方や進め方等、ゆっくり時間をとって丁寧に指導していくともっと伝える力が向上するだろう。

学生の感想（一部抜粋）

- まだまだ活動の経験の少ない段階で他の人の活動の内容や体験談を聞かせてもらったため、今後自分が活動に参加していく際にとっても参考になると考える。
- 自分が行った活動をしっかり振り返るきっかけになった上、グループの人や上級生アドバイザーの人から学ぶことが沢山あり、有意義な時間になって良かった。今後の活動では、自分の得意分野でない活動にも積極的に参加し、目標を持って活動に取り組んでいきたい。
- 1000時間体験学修の活動の意義について改めて考えることが出来た。時間を貯めるために活動するのではなく、自分の将来のプラスになるために、やる気と学ぶ姿勢を大切にしていきたいと思った！
- 基礎体験活動に参加して、自分が今までとは違い教える立場として子どもと関わることで得た経験や課題を、その時その時の反省として止めるのではなく、これからの体験や教育活動に活かせるよう長い目で考えていく必要があると学ぶことができた。

3) 1・2年生基礎体験交流会

本セミナーは、基礎体験活動（選択）について、同学年だけでなく他学年との交流を通して振り返り、今後の活動へのより良い見通しをもつことを目的として行った。約260名（2学年分）の学生を一堂に会して行うことは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から避けねばならず、そのため内容を精選し、時間を短縮することにより、一日3回（3～5コマ）に分散して開催した。

1・2年生基礎体験交流会2022実施概要

【1. 目的】

- (1) 個々の基礎体験活動の実績を振り返り、自己内省を促す。
- (2) 同学年や他学年との基礎体験活動に関する情報交換を通して、多様な学びを共有すると共に、今後の体験活動に対しての意欲を高める。

【2. 対象】 1年生 133名 + 2年生 120名 計253名

【3. 日時】 令和5年2月6日（水）

- (1) 1回目（Aクラス1・2G, Bクラス1・2G, Cクラス1・2G, Dクラス1・

2 G) 13:00～14:35

(2) 2回目 (Aクラス3・4 G, Bクラス3・4 G, Cクラス3・4 G, Dクラス3・4 G) 14:55～16:30

(3) 3回目 (Aクラス5・6 G, Bクラス5・6 G, Cクラス5・6 G, Dクラス5・6 G) 16:50～18:25

【4. 会場】 大学会館3階 大集会室

【5. 内容】

(1) 開会行事 ①挨拶 (教育支援センター長の話) 【5分】

②趣旨・日程説明 【10分】

(2) 研修1 【15分】 基礎体験活動の実施状況及び注意事項等 (説明)

(3) 研修2 【55分】 これまでの基礎体験活動の実施状況や学び等について情報交換等 (フリップトーク)

○自己紹介

○情報交換テーマ

①取り組んできた体験活動, 印象深い体験活動&理由

②身に付いたと思う「10の教師力」, 身に付けたい「10の教師力」とこれから

③フリートークタイム

(4) まとめ・振り返り 【10分】



<基礎体験交流会の様子>

以下, 教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示す.

教職員の振り返り (一部抜粋)

○異学年との交流が対面でできて良かった.

○時間配分も良く, フリートークも会話が弾んでいた.

○フリップトークの際には, 相手にわかりやすくはっきりと伝えられるよう, 事前に指導するとともに, マジックペン等を用意することなどの準備も必要であると感じた.

学生の感想（一部抜粋）

- 前期に行われたスタートアップセミナーと比較した際に、異なる点は2年生の先輩がいらっしゃったという点である。2年生の先輩がいらっしゃったことによって、自分が行ってきた基礎体験活動からどのような活動を通して何を学んだかということに対して、より経験がある先輩から複数のアドバイスを頂けたことが何よりも収穫だった。更に、スタートアップセミナーでは4年生のアドバイザーの先輩からアドバイスを頂いたが、どうしても3つ年が離れているときこなくなってしまうたり、経験が違い過ぎたりして会話が一方的な質問になりがちであった。しかし、2年生の先輩方は1つしか年が離れておらず、来年の自分を想像する良い機会となった。
- 私は楽しく1年生と交流をすることができた。自分が経験した2年間の基礎体験活動を、1年生に対して経験を話すことができたため、それが1年生の役に立てられれば幸いだと思う。また、基礎体験活動を通して私が身につけることができた力は、私と同じものをグループの人も持っていたが、力を身につける過程が人それぞれ違っていたため、人の経験を聞くことの大切さを改めて感じるすることができた。また、他学年と交流が行われたことで、これから3年生になる自分たちと、2年生になる1年生たちとは、基礎体験活動の選び方や捉え方に違いがあることがわかった。そのため、人それぞれの物事の捉え方の他に、学年での捉え方の違いにも目も向けていき、視野を広げていきたいと考えた。
- 今回のセミナーでは、自身が行ってきた活動や他者が行ってきた活動などを比較することで自分にどのような力が付いたか、逆にどのような力が足りないのかに気づくことができた。まず、自分はほとんどの活動が学校とは別の場所に行っていて、そこでの人たちと会話をする事が多く、コミュニケーションなどの面ではいい数値が出ていた。一方で、学校理解という面ではかなり低かった。自己分析にはなるが、それはやはり学校に実際に行くことがほとんど少なかったことが原因だと考えられる。他回生には実際に学校に行って勉強を教える活動を行っていた人もいて、そういった人はやはり学校理解という点が高かったことから、これからの活動では実際に学校に行く活動を多く行いたいと感じた。

4) 充実期セミナー

本セミナーは、2年生を対象として行う基礎体験セミナーである。入学してから1年半が経ち、学業も生活も充実してきた時期を捉えて、基礎体験活動について改めて見つめ直す機会として設定した。なお、本セミナーも分散開催により2回に分けて行った。詳細は下記のとおりである。

充実期セミナー2022実施概要

【1. 目的】

- (1) 基礎体験領域でねらう資質・能力の視点から、これまでの取り組みを分析し、他者と比較しながら各自の成果と課題を明らかにする。
- (2) グループ協議により、基礎体験への意欲の違いや考え方について明らかにするとともに、基礎体験がより充実・拡大していくような意欲づけを行う。

【2. 対象】 2年生 131名 ※上級生アドバイザー（4年生） 12名

【3. 日時】 令和4年9月27日（火）

- (1) 1回目（A, Bクラス）13:00～14:20
- (2) 2回目（C, Dクラス）14:55～16:15

※「学校教育実践研究Ⅰ」のグループを解き、基礎体験活動の体験時間数（9月7日（水）時点）の様々な学生でグループ構成を行った。その際、性別と専攻のバランスも考慮した。

【4. 会場】 大学会館3階 大集会室

【5. 内容】

- (1) 開会行事 ①挨拶（教育支援センター長の話） ②概要説明
- (2) 全体指導 ①趣旨説明 ②基礎体験領域における実施状況
- (3) グループ活動
 - ①活動の説明、司会者の決定、上級生アドバイザー（4年生）の紹介
 - ②体験活動発表会（活動内容、学び、課題、意義等）
 - ③上級生アドバイザーの助言
 - ④基礎体験活動のこれからについて（見通し、姿勢等）
- (4) 振り返り ①グループ代表の発表（数名） ②まとめ
- (5) 閉会行事 ①諸連絡



<充実期セミナーの様子>

以下、教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい。

教職員の振り返り（一部抜粋）

- 上級生アドバイザーの選定について、2か月も前から準備したのが良かった。
- 上級生アドバイザーからの助言、基礎体験活動についての体験談が後輩にとってはとても有益だったと感じられた。
- 上級生アドバイザーからの振り返り意見を聴き、今後の改善につなげていきたい。

学生の感想（一部抜粋）

- 様々な1000時間学修の活動を経験しているからこそ、それぞれの体験でどのような経験を積むことが出来たのか、どのような学びがあったのかをお話して下さい、これからの私たちの経験に繋げていくためにとても有意義な時間となった。
- このセミナーでは、自分の基礎体験活動を見直し、自分の短所や長所を考えるきっかけにもなったので有意義な時間だった。これからの基礎体験活動は、なんとなく選ぶのではなく、自分の短所を少しでも克服できるように必要な活動を選ぶようにしたいと思った。
- 去年も同じようなセミナーがあったが、1年前よりもさらに自分のことを客観的に考えることが出来、より教員としての意識を向けることが出来たと思う。また、4回生さんのお話を聞いて、1000時間体験学修の意義をより考えることができた。ただ単に時間のために行くのではなく、自分のコミュニケーションを高めるため、また自分の得意なこと不得意なことを見つけるために行くなど、目的を持って活動することが重要であることがよく分かった。後期からは、これまで経験したことのない様々な実習に取り組んでみたい。

5) 応用期セミナー

本セミナーは、3年生を主対象とし、加えて昨年度「学校教育実習Ⅳ・Ⅴ」を受けなかった過年度生も対象として実施した。下記に詳しく載せているが、基礎体験活動に対する成果と課題を明らかにするとともに、よりよい進路決定に向けてこれから取り組むべきことを具体的に考える機会となるよう設定した。詳細は下記のとおりである。

応用期セミナー2022実施概要

【1. 目的】

- (1) 基礎体験活動の実際を踏まえ、一人一人がこれまでの体験時間を確認し、基礎体験活動に対する成果と課題を明らかにする。
- (2) 学校教育実習での活動を振り返り今後の大学生活を展望するとともに、進路決定に向けての自己啓発を強く促す。

【2. 対象】 3年生 108名+過年度生 11名 計119名 ※上級生アドバイザー（4年生）18名

※今年度「学校教育実習Ⅳ」および「同Ⅴ」履修者が対象。ただし、開会行事からポスターセッションまでは対象外の学生も参加を認めた。

【3. 日時】令和4年12月7日（水）13：30～16：00

【4. 会場】第二体育館

【5. 内容】

(1) 開会行事【10分】 ①挨拶（教育支援センター長の話） ②趣旨や日程等の説明

(2) 全体指導【10分】 基礎体験活動の活動状況について

(3) ポスターセッション【80分】

①ポスターセッションについての説明【10分】 ②ポスターセッション【70分】

	ブース①	ブース②	ブース③	ブース④
1回目	島根県小学校	高等学校	島根県中学校	民間企業
2回目	〃	岡山県中学校	〃	〃
3回目	〃	広島県中学校	〃	〃
4回目	〃	高等学校	〃	〃

	ブース⑤	ブース⑥	ブース⑦	ブース⑧
1回目	公務員	特支学校	岡山県小学校	鳥取県小学校
2回目	〃	大学院	広島県小学校	鳥取県中学校
3回目	〃	〃	岡山県小学校	鳥取県小学校
4回目	〃	〃	広島県小学校	鳥取県中学校

※進路の内定を得た4年生18名が上級生アドバイザーとなり、8か所ブースを設け、1回あたり発表10分+質疑5分のポスターセッションを4回実施。

※特設ブース⑨幼稚園・保育園を設け、オンデマンド動画を視聴できるようにした。

(4) 進路に向けてのグループ協議（志望進路別）【30分】

①自己紹介も含め、これまでの基礎体験活動や学校教育実習を通し、自分にとっての「成果と課題」について発表し合う。【10分】

②現在考えている進路と志望理由、今後の準備・対策等について分からないことや困っていること等について意見・情報を交換し合う。適宜、上級生アドバイザーから助言をもらう。【20分】

(5) まとめ・諸連絡【10分】

①まとめ 参加学生4名による感想発表と、上級生アドバイザー1名から激励の言葉。

②諸連絡



<応用期セミナーの様子>

以下、教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい。

教職員の振り返り（一部抜粋）

- 参加対象外の学生にもオープン参加の機会を与え、上級生アドバイザーによる進路についての体験談を聴くことができて良かった。
- 上級生アドバイザーによるポスターセッションでは、大型液晶モニターを用意したことにより、分かりやすく後輩たちに伝わったと思われる。また、実際に上級生たちが使用した参考書等の実物提示は後輩たちに好評だった。
- ポスターセッションの後のグループ協議では、議題は進路についてのみ絞った方が効果的だと思われる。基礎体験活動についての議題は、全体指導の後、ポスターセッションの前に行った方が思考の流れとしては良い。

学生の感想（一部抜粋）

- 今までの基礎体験活動がどの程度できているのかなど改めて把握することができたため、これからまだまだ体験活動をしていかなければならないと考えることができた。また、これまで体験してこなかったような活動にもどんどん参加していきたいと思う。
- 将来の志望が近い人と同じグループになることでそれぞれの人の状況や考え方を共有することができ、とても良い時間となった。また、上級生のプレゼンを聞くことで、採用試験への道のりがある程度把握でき、今後のモチベーションにも繋がった。
- 教員採用試験に向けて、今までおぼろげなイメージでしかなかったが、とても具体的なイメージを持つことができた。また、自分とは違う進路の話などを聞き、見方が大きく広がったと考える。同じ県の人と話すことができ、団体戦としての意識が高まった。
- 就職活動と教員採用試験を同時進行で行っており、両方の先輩からのお言葉を頂けたのは大きかったです。また、教員採用試験だけでなく、就職活動のブースを設けてくださり有難う御座いました。出遅れ就活生として、今後の就職活動に関する計画を具体的に立てることができました。

6) 発展期セミナー

本セミナーは、4年生を主対象とし、昨年度受講しなかった過年度生も加える形で実施した。「基礎体験活動と自分、そしてこれからの考える」をテーマに、1000時間体験学修における基礎体験領域での学びを総括する機会として位置づけた。詳細は下記のとおりである。

発展期セミナー2022実施概要

【1. 目的】

<1000時間体験学修における基礎体験領域での学びの総括>

一人一人がこれまでの体験時間を確認し、基礎体験活動に対する成果と影響度を協議することを通して、自分自身の学修について査察する契機とする。

テーマ「基礎体験活動と自分、そしてこれからの考える」

【2. 対象】4年生 122名+過年度生 5名 計127名

【3. 日時】令和4年9月26日(月)

(1) 1回目(A, Bクラス) 13:00~14:20

(2) 2回目(C, Dクラス) 14:55~16:15

【4. 会場】学生会館3階 大集会室

【5. 内容】

(1) 開会行事 ①挨拶(教育支援センター長の話)

(2) 全体指導 ①趣旨説明 ②基礎体験活動における実施状況

(3) グループ協議(全員参加型ディスカッション)

テーマ「基礎体験活動と自分、そしてこれからの考える」

①プログラムの説明とアイスブレイキング

②振り返りとディスカッション

ア 思い入れのある活動への振り返り

イ 身につけることのできた『10の教師力』の振り返り

ウ 基礎体験活動を今後どのように活かしていくか

(4) 閉会行事 ①まとめ



<発展期セミナーの様子>

以下、教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示す。

教職員の振り返り（一部抜粋）

- さすがに4年生だけあってグループ協議での話し合いが活発で、しかも内容に深みがあった。
- グループ協議では、司会を輪番で行うなど、誰もがディスカッションのスキルを高めていた。
- 欠席のために3名だけのグループがあったが、やはり議論を深めるためには最低でも4名以上に組み直すべきだったと感じられた。

学生の感想（一部抜粋）

- それぞれ体験してきたことが違ったり、教育実習を終えた4年生だからこそ出る意見が多く、各人興味関心があることも異なるので、これまで以上に自分にはない視点からの話を聞くことができた。
- 過去の基礎体験活動の中で、その時は意識していなかったことや、失敗したと捉えていたことでも、今振り返ってみると、その経験がいつの間にか成長に繋がっていたり新たな視点を持ったりすることができていて、この活動は宝物だったなと思いました。
- 基礎体験活動に対してどんなモチベーション、姿勢で取り組んでいたのか、何を学んだのかを共有して、これまでの学びをどんな風にこれから社会で活かしていくか、他の人の意見を聞いて、子どもとの関わりでどんなことを大切にするか、参考になることがたくさんあったので、これから職場でも活かしていけるようにしたいと思いました。

(5) だんだん塾講演会

コロナ禍に鑑み、昨年度同様に、センター演習「だんだん塾特別講義（動画）」の企画と連動した講演会として実施した。講師は例年と同様に教育現場や教育行政、企業等の外部機関から優れた実践者を招聘した。講演内容も教育現場に直接関わる実践的で多角的な内容となるよう企画・実施した（表11）。本年度は、3回とも対面で実施することができた。コロナ対応として、参加人数は30人を上限とし、ソーシャルディスタンスを確保しながら行った。毎回ほぼ2分の1を上回る参加者人数であった。

表11 だんだん塾講演会の開催実績

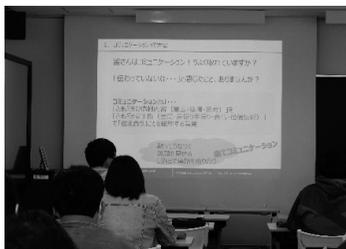
回数	日時	講演者	講演テーマ	参加人数
第1回	11月16日（水） 14：55～16：35	鳥取県教育委員会人権教育課指導主事 田村 公顕 氏	いじめの未然防止につながる人権教育	24名
第2回	1月18日（水） 15：15～16：45	出雲市立佐田中学校教諭 塔村 真吾 氏	アルゼンチン日本人学校から見た日本と教育	32名
第3回	3月8日（水） 13：10～15：10	Willさんいん 代表取締役 金築 理恵 氏	教育実習や基礎体験活動に役立つロジカルシンキングとは	15名



<第1回の様子>



<第2回の様子>



<第3回の様子>

2. 学内資格認定制度

教育支援センターでは、「体験学修ピア・サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス・サポーター」の3つの学内資格を設定している。今年度の認定者は延べ16名であった。(表12)

表12 学内資格認定者数

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	8名	3年生：2名，4年生：6名
学校教育ピア・サポーター	4名	4年生：4名
コミュニティサービス・サポーター	4名	3年生：1名，4年生：3名

3. 各受入先との連携

今年度も昨年同様、コロナ禍対策のため、以下の附属教育支援センター長通知文（一部抜粋）にあるとおり、コロナ禍前には例年行っていた連絡会議、説明会を中止とした（資料1・2）。なお、令和5年度の第1回基礎体験活動連絡会議及び合同説明会についても今年度同様に中止と決定している。

【資料1】 附属教育支援センター長通知文（一部抜粋） （令和4年3月25日付）
令和4年度 第1回基礎体験活動連絡会議及び合同説明会について
(時候の挨拶省略)

例年、4月中旬に基礎体験活動について説明していただきました連絡会議及び、各事業所から1年生に対しPRいただきました合同説明会につきまして、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響に鑑み、中止とさせていただきます。

なお、基礎体験活動の実施につきましては、下記のとおりですのぞしくお願いいたします。

記

【基礎体験活動の実施について】

- 現在も「新型コロナウイルス感染症に係る島根大学行動指針」により、基礎体験活動は停止しております。なお、基礎体験活動の再開に向けては、大学、学部と協議を重ねています。今後、再開できる時期が確定しましたら、各事業所宛にメール、またはFAXにより通知させていただきます。併せて教育支援センターHPにおいても公表させていただきます。
- 登録につきましては、従来通り申込みを受け付けていますので、島根大学教育学部附属教育支援センターホームページをご覧ください。
- 新1年生につきましては、開始時期を5月初旬に予定しています。
- 新1年生への各活動説明は4月中旬に大学職員がオンデマンド（非対面指導）で行います。実際の活動に入る前には、チラシを配布する事も可能ですので、希望される事業所はA4（1枚 両面可）で作成いただき、5部（またはPDF等データでも可）送付をお願いいたします。学生には、PDFとしてMoodle（学修システム）に掲載いたしますのでご承知ください。

【資料2】 （令和5年1月12日付）
令和4年度 基礎体験活動連絡会議の中止及び
基礎体験活動アンケート調査の実施について（お知らせ・お願い）
(時候の挨拶省略)

さて、島根県は、昨年12月、新型コロナウイルス感染症についてすでに第8波に入っており、警戒すべき状況であるとの認識を示しました。このような状況に鑑み、これまで2

月中旬に開催していました「基礎体験活動連絡会議」を中止することに決定しました。

「基礎体験活動連絡会議」については、実施年度の活動状況をふりかえり、次年度への方向性などについて共通理解を図る上で大切な機会ではありますが、このたびの措置について何卒ご理解いただきますようお願いいたします。

なお、本センターでは、次年度の基礎体験活動実施に向けての方向性などを検討しているところであり、次年度の方向性など確定した段階でお知らせしようと考えています。

また、検討していく際に、受入団体の皆様のご意見も参考にさせていただければと思います。年度末に向けた大変ご多用の折とは存じますが、下記のアンケート実施の手続きに基づきアンケートの実施にご協力いただきますようお願いいたします。

記

1 《アンケート実施の手続き》

- 右のQRコードからformsに入ってください、必要事項などをご記入願います。
- アンケート締切

令和5年1月31日（火）



Ⅲ おわりに

令和2年度から引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を講じた上で、「基礎体験活動をどれだけ実施することができるか」や「学生の教職離れに対応し、さらに教職志向性を高めるものへどのように変えていくか」に主眼を置き、取り組みを進めた。

新型コロナウイルス感染症の感染状況については、年度途中で拡大したものの、迅速、且つ、適切に対策を講じることで、継続的に学生を送り出すことができた。その結果、参加学生延べ数はコロナ禍以前とほぼ同様になった。しかし、その中には、学外での活動参加ではなく、「教育支援センター演習」をはじめとした学内や自宅で体験可能な活動に頻繁に参加する学生もみられた。このように、苦心しながらも1000時間体験学修でねらう学びを得ることができた学生が存在することも確かである。

また、教員採用試験合格者の平均体験時間数を見ると、基礎体験活動が教師力の育成に影響していることがうかがえる（図4）。今年度卒業生の平均体験時間数が1115時間程度となり、コロナ禍の影響を受けた昨年度卒業生の時間数（1094時間程度）よりは上回っているものの、例年の時間数（1200時間程度）と比較して100時間程度減少している。このことから、今年度卒業する学生は、3年間におよぶコロナ禍において、取り組める活動や期間、その方法・手段を模索しながら、学修を進め、体験時間数を積み上げていったことが想像できる。

令和4年度に実施された教員採用試験の合格者数は、卒業生128名中61名と約半数であった。不合格等により講師として教員になる学生数を含めると、今年度の教員就職率は68.1%となり、本学部の目標値65%を上回る結果となった。今年度の卒業生は2年生時から約3年間がコロナ

禍となり、前述のとおり、苦心しながらも体験活動を積み上げてきた。また、基礎体験活動を担当する教職員も同様に、初めての経験となるコロナ禍への対応に追われ、試行錯誤しながら、実践力を養う場を提供してきた。コロナ禍以前のように十分な内容を提供できなかったものの、教職を目指す学生だけに何とかしてやりたいという思いで、苦勞しながらも、そうした実践力を養う場を提供できたことは意義あることであろう。

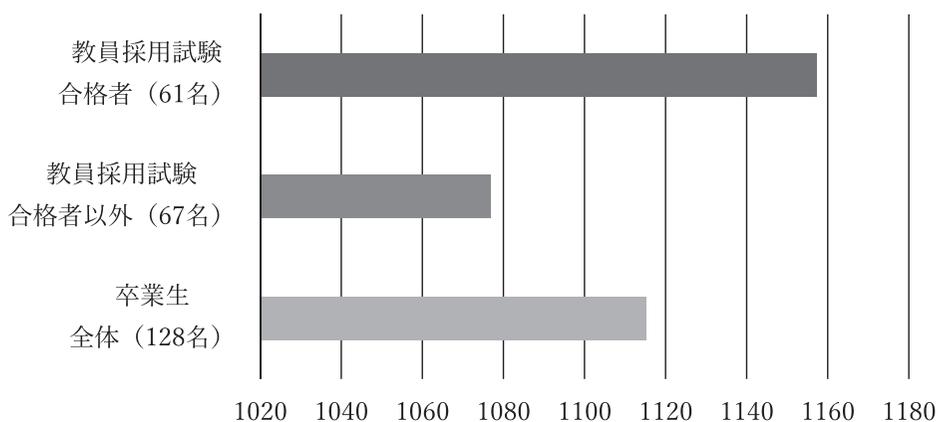


図4 令和4年度卒業生における採用試験の結果別にみた体験活動時間数